

日本人類学会進化人類学分科会

ニュースレター

2015/3



目次

次回案内

第 34 回シンポジウム 「子供の時期から見た人類進化」 2

平成 25 年度 開催シンポジウム

第33回シンポジウム「人類の社会性とその進化：共在様態の構造と非構造」 3

河合香吏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

趣旨説明 4

足立薫（京都産業大学グローバル化推進室）

『接続』の方法—霊長類社会学における非構造 6

曾我亨（弘前大学人文学部）

人類学的視点から考える新たな他者像 10

内堀 基光（放送大学教養学部）

人類小集団の生成と崩壊 14

坪川 桂子（京都大学大学院理学研究科）

コメント 1 18

真島 一郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

コメント 2 21

諏訪 元（東京大学総合研究博物館）

コメント 3 23

質疑応答 26

次回案内

第34回シンポジウム

「子供の時期から見た人類進化」

時期：5月下旬から6月下旬の土曜あるいは日曜

場所：京都大学または京都駅周辺予定

オーガナイザー：葛谷匠・京都大学大学院理学研究科, 日本学術振興会（2015年4月より）

<シンポジウム趣旨>

ヒトを含む霊長類の子供は、養育者に完全に依存する乳幼児期からその生涯をはじめ、心身の発達や性成熟を経て大人に成長していく。比較的大きな脳を持ち、少産少死のゆっくりした生活史を特徴とする霊長類では、特に、離乳が終わり繁殖を開始するまでの「子供の時期」が長い。この時期は、大人個体との競合を避けながら、将来の生存や繁殖のための学習をする期間であると位置づけられることが多い。そのため、「子供の時期」は大人の時期に従属するものとみなされがちで、それ自体が研究の対象となることはあまり多くなかった。しかし、子供も大人と同じく社会や家計を構成するメンバーであり、子供と大人のどこがどのように違うのか、あるいは同じなのか、そしてそうした子供の特徴が社会や家計のあり方にどのような影響を与えるか、という点も重要な研究課題である。これまでの研究の集積や近年盛んになってきた研究により、大人より劣って受動的に影響を受けるだけの存在では決してない子供の特徴が、だんだん明らかになっている。

本シンポジウムでは、人類進化、古人骨、霊長類、文化人類学、近現代における「子供の時期」について、子供に見られる特徴と、それが大人個体を含む社会のなかでどのように位置づけられるかを報告してもらおう。それらの知見をふまえて、子供という存在が、ヒトを含む霊長類の社会や行動や生活史の進化にどのように影響を与えてきたのか、議論したい。

「人類の社会性とその進化：共在様態の構造と非構造」

2014 年 11 月 3 日(月・祝) アクトシティ浜松コンgressセンター

オーガナイザー：河合 香史（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

パネリスト 1：足立 薫（京都産業大学グローバル化推進室）

パネリスト 2：曾我 亨（弘前大学人文学部）

パネリスト 3：内堀 基光（放送大学教養学部）

コメンテーター 1：坪川 桂子（京都大学大学院理学研究科）

コメンテーター 2：真島 一郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

コメンテーター 3：諏訪 元（東京大学総合研究博物館）

概要：

人類は進化史的にはごく最近（600～700 万年前）まで、チンパンジーやボノボなどの類人猿とともに進化の過程を歩んできた。こうした進化的根拠をもつ人類の存在のありようを見据えるにあたって、その高度な社会的能力（以下、社会性：sociality）の獲得を種そのものの成立における最も重要な特質とみなし、その特質、すなわち社会性の起原と進化について、霊長類社会学、生態人類学、社会文化人類学という 3 つの学問分野から接近する。これら 3 分野間で互いの知見や理論を共有し、群居性動物としての人類が発達させてきた複雑で多様な社会のありよう、いいかえれば複数個体の共在様態について、その構造のみならず、「非構造」の側面にも着目することによって、人類の社会性の進化の解明に新たな展開を試みる。

以下、シンポジウム当日の録音記録に基づいて内容を記載する。

河合:おはようございます。時間となりましたので、第33回進化人類学分科会シンポジウム「人類の社会性とその進化：共在様態の構造と非構造」を始めます。今日は朝早くからご参集いただき、ありがとうございます。本シンポジウムのオーガナイザーで、司会を担当いたします、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の河合香吏でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日の予定ですが、はじめに私から簡単に趣旨説明をいたします。次に3人のパネリスト、京都産業大学の足立薫さん、弘前大学の曾我亨さん、放送大学の内堀基光さんから20分ずつご講演をいただきます。引き続き、京都大学の坪川桂子さん、東京外国語大学の真島一郎さん、東京大学の諏訪元さんからコメントをいただきます。そのあと、おそらく非常にタイトになると思いますが、フロアのみなさまをまじえて、討論の時間をもちたいと思います。シンポジウムに続き分科会の総会をする関係で12時05分までに終われと言われております。1時間55分という短い時間ですが、よろしくおつきあいくださりますようお願いいたします。

本シンポジウムは、私の本務校で続けてきました共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」をもとに企画したものです。この共同研究では、人類が進化の過程で獲得してきた高度な社会的能力、すなわち、他個体とともに生きていくための能力、これを我々は「社会性 (Sociality)」と呼びまして、複雑な、しばしば巨大な社会を構成する人類という種の誕生の最重要な特質とみなして、霊長類社会生態学、生態人類学、社会文化人類学の三つ巴で議論するというのを続けてまいりました。この共同研究は、2005年度に「集団」をテーマに開始し、「制度」、「他者」とテーマを展開しながら、今年でちょうど10年になります。本シンポジウムのパネリストの3名はいずれも立ち上げ当初からのメンバーです。今日はこの

3名からこの共同研究の成果の一部を、シンポジウム副題にあげましたように、複数個体の「共在様態」に的を絞って紹介していただきます。

それでは、ごく簡単に、この共同研究について、これまでの経緯をお話し、趣旨説明にかえさせていただきます。はじめに取り組んだテーマは「集団」でした。その成果本には『集団』、英語版に“Groups”という簡潔な、あるいは大袈裟ともとれるタイトルを付けた思いというか、主張したかったことは、ヒトやヒト以外の霊長類が「集まる」という単純な事実からわれわれは出発するのだということでした。それは抽象的な「社会」や「コミュニティ」に回収されることなく「共同性」を語る姿勢です。成果について1点だけご紹介します。「非構造概念」の重要性です。今日は足立さんと内堀さんが詳しく紹介されますが、研究会でとりあげられた集団現象の多くが非構造の集まりでした。たとえばサル集団内の順位構造といった構造面ではなく、メンバー間の具体的な関係、つまり「社会的絆 relatedness」からみえてくる集まりです。いずれも自律的な個による緩やかで自由な集まり、一時的であるがゆえに動的でダイナミックな集まりであるという共通点があります。こうした集まりは、生活時間に占める割合も少なくない、もっと正当に評価されるべき集まりで、集団の現実の姿とは、そこに何らかの非構造を含んでいるものであることを積極的に評価したいということです。

次にテーマとしたのは「制度」です。集団にはそれを成立させ、維持するための何らかの原則がある、逆にいえば、現実に複数の個体が集団を成して暮らしているということ自体、そこには共存のための何らかの原則ないし力学があることを示しています。われわれはそこに「制度」の起原、制度の萌芽をみようとしてきました。人間の生活世界では、その隅々まで、さまざまな制度が、あるときは明示的な法的

規制として、あるときは半明示的な道德律として、あるときはより暗黙的なコンヴェンション（因習、習律）として、浸透しています。これらの制度は、言語によって媒介、構築されていることは確かです。通常の社会科学の制度論はこの前提に立っています。けれどもわれわれの射程はこうした前提の奥にある進化的な基盤にまで及ぶもので、言語に媒介された制度ですら、その基盤には言語的に表示されない原理が横たわっていることを解き明かそうとしました。それは個体間の関係を律する行動原理であって、人類以外の霊長類の社会に視野を広げてみて初めて理解されるような「原制度」、「プロト制度」ともいうべきものです。こうした部分に目を向けない限り、真の意味で人類の進化を視野に入れた制度理解とはならないだろうということです。

「集団」から「制度」へとテーマを展開しながら、一貫してとってきた方法論として、われわれは、意識的に、人びとやサルたちの具体的な行為、行動に

着目してきました。そこで次は、そのこと自体を主題化して、「他者」というテーマを設定しました。「集団」や「制度」が、対象をどちらかといえば、マクロな側面からとらえてきたのに対し、ミクロな個の視点に立つものです。ここでは、個体間の対面的相互行為に着目して、「他者」なる存在は、個に対して、どのように現れ、対峙し、関係するのか、といった問いに向かいました。「他者」という概念は、なかなか難しいくせ者でして、研究会としては、まだ結論めいたものに至っておりませんが、今日は曾我さんがこの難題に挑戦してくださいませ。

以上、簡単ではございますが、これまでのわれわれの共同研究について、今日の趣旨説明を兼ねてお話いたしました。それでは、さっそく、パネリストにご発表をお願いしたいと思います。はじめは、足立薫さん、『『接続』の方法—霊長類社会学における非構造』ということで、お願いいたします。

足立：「非構造」というのを、この後お話しする二人のパネリストの方のお話につなげるための、露払いであるというふうに認識しておりますので、上手くその部分をつなぐことができればな、と思っております。「非構造」という言葉は、私たちサルをやるものにとっては、あまり耳慣れた言葉ではないのです。まずは、その「非構造」とは何かということをお伝えしなければいけないのですが、最初に、ここで私が「非構造」としてご紹介しようと思っているものは、サル学のパイオニアの一人であります伊谷純一郎さんが、1991年の「社会の構造と非構造」という小論の中で紹介されたものに代表される概念になります。今日は、「非構造」とは何かということをお話するにあたって、「非構造」、「非」構造なので、構造ではないものという、大きなくくりになるのですが、いつも私はこの構造ではないものを、構造から説明し始めて失敗するという、同じ過ちを常に繰り返しておりまして、何とかそこに落ち込まないように説明をしたいということ、今日のチャレンジとして持ってまいりました。「構造」と「非構造」という対になる概念は、「図柄」と「地」というような関係にあって、今日は種社会というお話はあまりできないと思うのですが、全体の中での、二つに組み合わせさせた不可欠な要素という様態を持っている、ということをお伝えしておきたいと思えます。「構造」を先に持ってこずに、「非構造」をご説明させていただいた後、霊長類社会学における「構造」「非構造」とは何か、それから、今日の本題とさせていただいています「接続」の方法というところにつなげてお話をしていきたいと思っております。まず、「構造」を言わずに「非構造」だけを先にしゃべってしまおうという、乱暴な戦略を今日は取ってみたいと思っております。

伊谷さんが、その小論の中で挙げられた「非構造」

の例がいくつかあります。最も初めに挙げられているものが、ヒトリザルと呼ばれるニホンザルの若オスになります。ニホンザルは母系の社会を作っておりまして、メスが出自集団に生まれたグループにとどまって、オスが移籍をするという社会構造を持っています。オスが性成熟に達すると、これが群れを離れて、一人になる、ヒトリザルになる、という、これを「孤猿」という言葉で表現されているのですが、その後群れに入らずに放浪生活を送る、その自由な在り様というのを指して、「非構造」という言葉をまず使っておられます。ここで、群れの中の社会の在り様と、ヒトリザル、「非構造」としてのヒトリザルが会う時には、そこは異常に静かである、と、沈黙がそこを支配している、ということ、非常に印象的に書かれています。

もう一つ、次に例に挙げられているのが、混群という現象になります。混群は、霊長類学の中ではわりと有名な生態学の主題で、アフリカではオナガザル類の混群というのがよく見られます。異種の群れ、異種の個体が入り交じりあって一つの群れを作る現象を混群というのですけれども、これは、群れの輪郭というのが非常に変動するのです。群れの輪郭をどんどん変化させながら、それでもなおかつ一つの群れとして、ずっと存在し続けるという、そういうルーズさというか、曖昧さというところを捉えて、混群は「非構造」であるということ議論されています。私がアフリカのコートジボワールで見てきた群れはこういう感じです。樹上性のサルなのですが、よく見にくいのですが、異なる種のサルが、一つの大きなまとまりを作らずずっと移動していくというような現象です。こんな、見た目の違ういろいろなタイプのサルなのですけれども、こういうものが一つの群れを作っていきます。先程、「非構造」としてのヒトリザルは沈黙という特徴があったというお話を

しましたが、この混群という特殊な群れのタイプに特徴的なのは、同種の群れの中のように、目立った社会交渉、喧嘩をしたり仲良くしたりといった、直接的な社会交渉がほとんど見られないというところに特徴がある、ということをお伝えしておきたいと思います。

ヒトについても、「非構造」の例というのがたくさん挙げられています。まずは人類学の方から、通過儀礼、ターナーの提唱したコミュニタスの概念というのは「非構造」とほぼ同じものを指しているということが紹介されます。その後に具体的な事例として紹介されていくのは、狩猟採集民のピグミーの人たちが、夜になって、村の中で自然発生的に歌を繰り広げる、あるいは踊りを続ける、そういう要素、あるいは、もう一つ書かれているのは、牧畜民の家畜の略奪です。略奪され、略奪仕返しに行く時の興奮状態、それと、ヒトと家畜が人畜一体となってその場にいる様子、というのが「非構造」の具体的な例として紹介されています。

こういうもの全般を、「非構造」という言葉で表現しようとしているわけなのですから、ごめんなさい、もう一つ。霊長類以外ですね、ヒトと、ヒト以外の霊長類を除いた動物の中にも「非構造」は見られるということで、鳥と有蹄類が挙げられています。特に鳥については、非常にお好きだったこともあって、長いテキストがそこに割かれているのですが、先程紹介した、サルと同じように、混群ですね、繁殖期以外にこういった動物が作る、非常に大きな集団、あるいは種を超えた集団というものの中に、この「非構造」の様相というのが出てくる、というのが紹介されています。

霊長類社会学の中で、「非構造」の持つ意味を考える時に、では「構造」はどのようなものとして捉えられているのか、というのを簡単にご紹介したいと思うのですが、霊長類学で「構造」と言うと、一番先に出てくるのがBSU、Basic Social Unitと呼ばれるもので、基本的単位集団というふうに訳されます。これが、今日は詳しくお話するのは避けようと思うのですが、社会構造を単位とした進化論を支

えていく単位になります。これは、社会に含まれる個体の性別と、移籍のパターンによって類型化されています。さらには、それを進化の方向性に沿って配置していく単位として、「構造」というものが存在します。これも、見ていただくのにとどめようと思うのですが、オスとメスがBasic Social Unitから出ていく、入っていく、というので、6つのパターンを類型化しています。それに対して、同じ6つのパターンを、上から下に向かって進化の時間が流れていくような形なのですが、右側の方、こういう形で進化の道筋をストーリーとして描いていく、というのが、霊長類社会学における社会の「構造」の扱い方のパターンということになるのです。

社会構造について、「構造」と「非構造」があった時の、「構造」の方側には、規矩と伊谷さんがお呼びになるルール、物差しが存在します。社会構造が「構造」として成立するのは、個体がある種のルールに従って社会交渉を行うからであると、それは、種それぞれに固有であって、非常に目立つ、きらびやかな、そして定型的なものである、そういうものの多くは、個体の順位を決める優劣であるとか、誰と誰が仲良くするというような親和関係とか、そういうものに関わっているといわれます。生物学の中で、こういうものは、適応的な利益であるとか、繁殖上の利益であるとか、そういうものに非常に合理的に結び付けることができる。こういうものに従って、それを規矩と呼んで、この合目的に解釈可能なルールが社会構造の中での個体の存在を可能にする、というのが、社会構造の方側の論理になります。

「非構造」と「構造」という二つのものを用意したところで、今日はこれを接続するという形で、共存の様態を理解したいというところのお話をさせていただきたいと思います。まずは、何と何を接続するか、なのですが、「構造」と、「非構造」の接続ということなのです。最初にもお話をしたのですが、「構造」と「非構造」は不可分です。多くの場合、生物学は「構造」の方に着目をしてきました。なので、「非構造」は、「構造」に至る、「構造」を可能にしている、可能体としての「非構造」とい

う視点が取られることが多くあります。先程その「非構造」の時間というのが、無視できるような長さではないというお話をされましたけれども、どんな生き物であっても、「非構造」から「構造」、可能体としての「非構造」から「構造」へ、というような、フェーズが変わる現象というのを見ることができません。あるいは逆に、「構造」というものがあつた時に、そこからいつでも「非構造」に変化していく、そういう変わっていく側面というのを、様々な動物、ヒトも含めて、ヒト以外の霊長類も含めて見るのが、実際に可能である、ということが、ニホンザルのヒトリザルであるとか、混群などの現象から見てとれます。

その時に、何だかわからない、一人、あるいはルールのない、非常に自由なものとしての「非構造」というのは、かっちりルールが決まって、集団の構成を作っていく「構造」というものと、不可分な形で「地」と「柄」の形を作っているのですが、伊谷さんが強調されているところの、「非構造」と「構造」の間には、常に生気に満ちた交流があるのだ、ということを主張されます。分かれているもの間に交流がある、私たちはその生き物、あるいはその集団とかサルの群れとか、そういうものを見た時に、生き物である、生きているというのはどういうことなのか、ということを、常に現場では意識せざるを得ないわけです。その時に、「非構造」は今まで非常に質的な言葉のみで表現されてきたのです。自由だとか、ルーズだとか、静かだとか、そういう言葉で意識せざるを得なかった。それに対して「構造」の方は、私たちは生物学の言葉を持っていて、適応的な価値とか、繁殖成功度とか、その進化的利益という言葉づかいを持っているわけです。この「地」と「柄」の両方が見たい、「非構造」が重要だ、「非構造」を見たい、ということを考えてきたのですが、本当に大事なところは、実は「地」と「柄」、「構造」と「非構造」が実はつながっているというところにあつて、そこにこそ生き物の生き物らしさがあるとすれば、この「構造」と「非構造」が接続する部分、いきなり「非構造」を全て言葉で書きくだす

ことは無理であつたとしても、「構造」と「非構造」が接続する部分に焦点を当てることによって、私たちは生き物の、その生き物らしさというところにアプローチできるのではないかと、というふうに思っています。

もう一つは、サルとヒトの接続です。「非構造」の概念を考える時に、「非構造」はヒトにだけ見るものではないのです。ヒト以外の霊長類、あるいは鳥や有蹄類にも、「非構造」の社会性というのを見つめることができる。「非構造」は逆に、ヒトにないものではない、あれ、反対か、ヒトに特異的ではないから、ヒトだけではない、ヒト以外の霊長類に特異的ではない、だから、オナガザルだけが「非構造」を持つわけでもないわけです。ヒトにもある。で、鳥や有蹄類にもある。つまり、「非構造」という概念は「構造」と不可分であると同時に、生き物の生き物らしさをヒト、ヒト以外の霊長類、それ以外の生き物、という全体に通底する形で持つことができる社会性というふうに言えるのではないかと考えています。そうすると、進化を私たちは、霊長類社会学の中で考えたい、ヒトにつながる進化を考えたい、と思うわけですが、ヒトにつながる進化というとしても、下等なものから何か置き換わり、何かを付け足し、そうやってシンプルなものから複雑なものへと一直線に進化が進んでいくという形で社会を理解してしまいがちなのですが、それは、「構造」はそのようにシンプルなものから複雑なものへいったとしても、「非構造」を考えると「構造」の裏にいつも不可分な形で置き換えや付け足しではない進化を辿るものが、いつも裏にくっついているという形で、新しい形での社会の理解の仕方というのが可能なのではないかと考えています。そういう意味で、「非構造」の側面から社会を考える、社会の集団の、個体の在り様というのを考えるということ、ここではご紹介をさせていただきました。終わりです。

河合：ありがとうございました。ご質問とかご意見等あるかと思いますが、時間の関係上、最後の討論の時間にまとめてということにしたいと思

ます。それでは次に移らせていただきます。では曾
我さんに、「人類学的視点から考える新たな他者像」

ということで、お願いいたします。

曾我：弘前大学の曾我です。今日は、「人類学的視点から考える新たな他者像」という題でお話をします。まず、今、河合さんの最初のイントロダクションのところで、他者について今、研究しているという話がありましたけれども、何で他者を考えるのか、あるいはどういうふうに考えるのか、ということをお話したいと思います。

人格、パーソナリティというのは、人間性の重要な要素と考えられていますけれども、この人格の基盤に、自己意識というものがあります。これまで霊長類学や他の学問でも、鏡像認知を指標に、動物の自己意識については研究されてきたことは、みなさんご存知のことと思います。人格の方が最終的なゴールになるのですけれども、この人格というのは他者に基づいていると言われていています。発達心理学や社会学では、社会関係の中で、つまり他者との関係の中で、人格が形成されると言われておりますし、現象学的哲学でも、人格の成立には、他者と出会うことの衝撃が重要だ、と言われていています。そうであるならば、類人猿などの行動にも、人格、つまり他者との関係の中から作りあげられるものがあるように感じられます。ただ、人格というものを考える時に、人類学者が哲学の側から考えるのは難しいです。観察ができないからです。今回は、類人猿などにも適応可能な他者の概念、これは観察できる概念ということになりますけれども、そういうものを作っていきたいな、と思います。

他者というのは一体どこにいるのか、どういうふうに見出されてきたのか、振り返りましょう。哲学はこれまで、他者を、自分以外の人は全て他者であるとして、自分と他者の関係、つまり個人間の関係として描いてきました。そのやり方は大きく二通りあって、「他者は理解できる」とするもの、あるいは「絶対に他者は理解できない」とするものがありま

す。ただ、これらの考えを読んでも、哲学者は他者を考える際に、集団間の関係を全然考えていないように思えます。それから、哲学者のいう他者の存在を検出する方法がないことにも気づきます。哲学者は間主観性を手がかりに他者を考察していきますが、間主観性を、観察で捉えるのは難しいのです。

一方、人類学は他者をどう考えてきたかと言うと、もともとは、社会の外に他者がいると考えました。最近では、他者が社会の内部にもいる、というふうに見方が変わっています。もともと人類学は、社会を均質なものとして想定したようです。例えば、文化とはある社会のメンバーが自らの行為を、意味あるものへと変換する象徴体系である、と言われていています。例えば、こう手を上げた時にこれを挨拶だというふうにする、手を上げるという行為を、意味ある挨拶というものに変換している、これが文化です。文化を共有している人の中では、手を挙げるのが挨拶だとわかりますが、違う文化に属する人になると、これが挨拶とはわからない。例えば鼻と鼻をくっつけたりすると、何でそれが挨拶なのかよくわからない。同じ社会の内部は、同じ文化を有する均質な空間が広がっており、そこに他者は存在しないと考えられてきた。他者が存在するのは文化を共有する者の外側、すなわち異文化だったのです。

ところが、社会をよく見てみると、ジェンダーとか世代とか人種とか階級など、均質とは言いがたい状況が内部に見出されていきます。そこで現在では、他者は社会内部の、差異の先に見出されるようになってきました。ただ、この人類学の他者というのは、いつも集団の存在を前提としていて、個人間の関係を無視しているようにも思えます。

そこで、これらのことを踏まえ、今回の発表では、3つの目標を設定しました。1つめとして、他者を、自分の隣にいる人との関係から他の集団との関係ま

での連続のなかに捉えていきたいと思います。2つめに、哲学は「他者とは何か」という問いをよく立てますが、本発表では、むしろ、他者はどういうふうに感知されるのか、その状況を観察できるものとして考えていきたいと思います。3つめとして、他者を、本シンポジウムのテーマである、「構造」と「非構造」の関係の中においても考えていきたいと思います。

他者とは何か、まず簡単に決めておくと、これは、私に理解しがたい存在のことで、この理解しがたい存在を、何とか理解できると考える哲学者の代表として、フッサールがいます。彼はこういうふうに考えます。他者は、単なる私のコピーではないけれど、私の自己の変容体だと思ってもいい。私の主観も、他者の主観も基本的には同じ構造を持っていて、そうであるからこそ、私は間主観性を手がかりに、他者を理解することができるのだと言います。けれどもこの考えに、私はいささか不満です。

私の身体と他人の身体が同じ仕組みであることに異論はありません。私がしょっぱいと感じるものを他人もしょっぱいと感じ、私が甘いと感じるものを甘いと感じる。それはそうかもしれないけれど、そんな他者を、私は他者として理解したいわけではありません。また、そんな他者が「私に理解しがたい存在」だというわけでもありません。私にとって理解しがたい他者というのは、むしろ、人格の形成に関係するような他者のことであり、それは、ものの考え方や意見が異なる他者のことです。例えば、卑近な例で言いますと、例えばヘイトスピーチをする人や、それを是認する人たちが、私にとって「理解しがたい他者」になります。こういう人たちがどのように理解したら良いのでしょうか。他者を感知するための状況を考えてみました。

私Bは、Aを他者と感じる時、いかなる状況があるのでしょうか。例えばX(「人」でも「物」でも「事」でも良い)があるとき、AがXに対して何らかの価値観を表明したとします。その価値観が私Bと異なっている時、そしてAがただ価値観を表明したというだけでなく、私Bを巻き込んでいくような動きが

ある時、私BはAに対して他者性を感知するのではないか、と考えました。

ここで重要なことは、これは非対称的な関係であるということです。例えばAが私Bを巻き込もうとする時、AはBに対して「今、Bは意見が違うけれども、いつかは同意見になるはずだ」と考える限りにおいて他者性を感じない。逆にBはAに他者性を感じる。こういう非対称性があると思います。

ではこれは具体的にアフリカの牧畜社会を例にとつて、どんな時に他者が感知されているのか、観察した事例をあげて見ていきたいと思います。

最初に取りあげるのは、「彼だけが知っている」という事例です。2002年、私は牧畜民ガブラの歴史を調査していました。私の調査に、現地の人たちは夢中になり、競うように「誰それがガブラの歴史に詳しいから聞きに行け」とか、「誰それはもっと知っている」とか私に向かって主張しあうようになりました。ある時、ハッサノという男性が、ある者について「彼ほど物知りの人はいない、彼は他のガブラが誰も知らないことも知っている」と自慢しました。人々は「いや誰それの方が知っている」などと話していたのですが、やがて、ハッサノの友人であるボナイヤが、「もし、彼しか知らないガブラの歴史があるなら、彼の知識は、ガブラの歴史ではないということだ」、とつぶやくように言うのを観察しました。この時に私は、ボナイヤ(図のBに当たる)がハッサノ(Aに当たる)に対して、他者性を感じているように感じました。

次の例は、「役職に就きたい」という事例です。1997年に、ケニヤで国政選挙が行われました。この選挙戦では、伝統的役職者がずいぶん活用されました。大量のお金を手に入れた役職者が、そのお金で有権者を買収するなど、いろいろなことがありました。大金欲しさに「役職に就きたい」と言う者が増え、争いも生まれました。さて、皆が役職者に就きたいと言いつついる時に、かつて役職者を務めたこともあるシャフィー老人は、「昔は誰も役職者になど就きたい者はいなかった。役職に就くと、調停や儀礼で忙しくなって、自由に放牧することが出来なくな

るからな)、とつぶやきました。この時も私は、シャフィー老人(図のBに当たる)は、役職に就きたいと言っている人たち(Aに当たる)に対して、他者性を感知していると感じました。

最後に、もうひとつ「集団の境界線」の事例を見ていきましょう。これまで、個人が他者性をどのような状況で感じているかを考えてきました。これは集団間の間でももちろん起きます。むしろ、日常生活において焦点化する事例の多くが、民族の境界線に沿って生じているようにも思えます。例えばガブラの近隣民族にトゥルカナという牧畜民がありますが、ガブラはトゥルカナのことを、「トゥルカナは毎年子供を妊娠する奴らだ」とか、あるいは「見ろよ、あの女性はまだ授乳しているのにおなかもう大きくなっているぞ」とか蔑むことがありました。ガブラには、3年に1回出産するという規制があるのに対し、近隣民族のトゥルカナは毎年のように子供を産むのを見て、こういう言い方をしたわけです。

あるいは別の近隣民族、ボラナについてはこんな言い方をよくします。「見ろよ、あのボラナが指輪をしているのを。ボラナの男はいつも指輪をしたがる。嫌な奴だ。」この指輪というのは何かと言うと、敵を殺した人がトロフィーとして指につけるものです。ガブラはどちらかと言うと殺される側になりますから、指輪をつけたボラナを見ると嫌悪する。こういう状況において、ガブラ(Bに当たる)は、トゥルカナ(Aに当たる)が子供を毎年産みだがる、あるいはボラナ(Aに当たる)が指輪を欲しがっているのを見て、そこに違和感を感じる、他者性を感じる、という図式がここにも描けると思います。

今、民族のことを例に出しましたので、一つ強調しておきたいのですが、民族を超えて共有される文化や知識、マナーなどもあります。ですから、いつも民族の境界に沿って、他者が感知されているわけではないと、注意を喚起しておきたいと思えます。

ここまで前半のところをまとめます。個人間の相互作用においては、異なる価値観の表明と、巻き込む動きがある時に、巻き込まれる側が巻き込む側に

対して他者性を感知すると言えるのではないのでしょうか。それから、文化や慣習、知識、マナーを共有する集団、これは民族に限らずいろいろな集団がそこには考えられますけれども、その境界の外側に他者性を感知することが多いのではないのでしょうか。

発表の冒頭で、私は新しい他者性概念をサルにも適用可能なものに拡張したい、と言いました。それでは、どのように拡張できるのでしょうか。例えば類人猿などにおいても、個体Aによる価値観の表明と、他の個体を巻き込む動きが観察され、なおかつ個体Bがその価値観に従わないような時に、個体Bは個体Aに対して他者性を認めている、というふうに言うて良いのではないのでしょうか。具体的には、例えばチンパンジーなどで、一位オスに対して、二位のオスAが対抗するために三位のオスBを巻き込んで、自分に協力させようとするとき、BがAに協力しない、ということがあり得ます。このとき、個体Bは個体Aに対して他者性を、あるいは他者性の萌芽のようなものを、感知していると言っても良いのではないのでしょうか。そのような拡張を考えています。

次に「構造」と「非構造」が今回のシンポジウムのテーマですから、これについても少しお話したいと思えます。他者性を感知し理解する方法には、二つの道があるように思えます。一つは相互行為のなかから直接的に感知し、理解するというもので、これは、判断の基準を何物にもよらない、非構造的な感知であると考えます。この感知は、先程のヘイトスピーチを聞いた瞬間に、私が他者性を感知したような事例(この人の考えは理解できない)が該当すると思えます。ただ、他者性を感知した後、その他者現象を非構造的に理解するのは、とても難しいだろうと思えます。例えば、伊谷先生はかつて、トゥルカナが執拗にねだってくるのをどうしても理解できない、心の基軸がすれ違ったままだった、というようなことをおっしゃっています。「心の基軸がすれ違う」のは、理屈で理解できたとしても、非構造的には理解できない。直接的に相手を理解するには至らないということだと思えます。

逆に非構造的に理解できた印象的な例として、レ

ナート・ロサルドという人類学者が、それまで理解しがたく感じていたイロンゴットの首狩りへの衝動を、非構造的に理解できた事例を挙げておきたいと思います。レナートはイロンゴットが語る首狩りへの衝動、すなわち「死別における怒りが、どのように人を首狩りへと駆り立てるのかを語った時、私は自分の経験からは、イロンゴットが感じるという激しい怒りを想像することができなかった」と言います。ところが、1981年、レナートの妻であるミシェル・ロサルドが、小道を歩いている時に足を踏み外し、8メートルほどの険しい断崖絶壁から転落し、下を流れる濁流にのまれて死亡してしまいます。レナートは「私は彼女の亡骸を見つけた直後、激怒してしまった。すすり泣きしたが、怒りのあまり涙が出なかった」、と語っています。彼は、妻の死という深刻な喪失を経て、イロンゴットの感じる「死別の時の激しい怒り」を直接的に理解できたのだと思います。ただし、このような理解は、できないわけではないけれども、常にできるわけではないし、理解するための方法論があるわけでもないと思います。

これに対して、第三項による感知と理解という別の理解の仕方があります。これは第三項に依拠した、構造的な理解と言えるでしょう。第三項とは何か。これは文化や慣習、知識、伝統やマナーなど、様々な集団ごとに形成される準拠枠のことです。第三項に依拠することで、集団の外にいるものを即座に私たちは他者と感知します。この時、重要なのは、第三項に依拠して他者を感知するとき、他者への関心や注意というものは非常に希薄であるということです。

また、第三項による理解とは、相手との直接的な相互作用ではなく、それ以外の理屈や理論などに当てはめることで理解する、というやり方です。例えば、私たち人類学者はフィールドに行って、いろい

ろな現象を見ます。その現象を、直接肌で感じるように理解するのではなくて、最新の理論に依拠しながら理解しようとすることがあります。こういう「当てはめ」が第三項による理解なのだと思います。

まとめます。他者性というのは異なる価値観と、権力（これは巻き込んでいく動き）の、二つの複合した状況で感知されます。他者性の感知には、直接的なものとは第三項によるものがあり、直接的な感知は「非構造」的、第三項によるものは「構造」的なものなのだと考えます。

最後に、これらを、人類が獲得した「他者をめぐる進化的基盤」の中において考えたいと思います。直接的に理解できない他者を、ヒトは第三項に拠ることで理解しようとしています。この心性こそが、他者を許容し大きな社会を形成することを可能にしたのではないのでしょうか。人類は、一方では価値についての体系として第三項を作り出し、同化できない他者を感知・排除しておきながら、その他方では、その他者を第三項に依拠しながら理解することで、その他者とはつながらないまでも共に暮らすことを許容するように進化したのだと思います。ヘイトスピーチを例に取るならば、ヘイトスピーチをする人のことを直接的には理解できないとしても、彼らが置かれた経済的立場を分析することで説明するとか、ナショナリズムの理論に依拠することで理解することは可能です。「しろうと理論」で理解することもあるでしょう。そういう形で理解することで、他者との共存を可能にする。それが私たち人類固有のやり方なのだと理解したいと思います。発表は以上です。

河合：曾我さん、どうもありがとうございました。それでは最後のパネリストになりますが、内堀さんに、「人類小集団の生成と崩壊」ということでお願いします。

内堀：放送大学の内堀です。私は基本的に進化とは関係ないというふうになっている民族学者でして（最近しょうがないので、社会人類学者とか文化人類学者と言っておりますけれども）、出自としては確実にエスノロジストであるということを前提にお話します。民族学者として人類進化に関わるというのはどういうことなのかということからお話いたします。

普通は、民族学者が何か進化について積極的に貢献できる場を作れと言われた時には、現在の狩猟採集民を題材に取ることが多い。それは当然、狩猟採集の生業形態が、進化してくる人類の中で長い時代を占めていたということによるわけですが、私自身は、それはやはり論理的に少しおかしいのではないかと思っております。現在の人類はいかなる生業を持っても、例えば技術者であったとしても、あるいはラボラトリーで研究する科学者にしても、いかなる生活をしていても基本的には種としての生存様式の範囲内にある、それを認めることが重要だと思っております。ですから、我々の最先端の科学技術的な生活まで視野に入れずに進化を語るの、本当はおかしい。ですから、ヒトと言う時に進化を語る時、狩猟採集ばかりやっているのは非常に不本意な語り方である。更に進めていけば、我々はいずれ死ぬ、人類というのもなくなるわけですが、あるいは、人類の全体ではなくてもその一部というのはいろいろな形でなくなっているわけですが、そうしたものの、生存の極限形態、なくなる際というようなもの、それはいろいろな方向で考えることができる。それを考えることによって、種としての生存様式の範囲、極限が確認されるはずである。「構造」と「非構造」の問題もその一環として見ていくことができるだろう、それで初めて「構造」と「非構造」というものが人類の社会性の進化とい

う語りの中に落ち着くはずであるというふうに思っております。

例えば、これは批判というかむしろ揶揄なのかもしれませんが、狩猟採集民の特異性についてシェアリングというようなことが言われています。シェアをする、ということが、大抵は食べ物ですが、狩猟採集民社会における、極めて他の生業形態と違う特異な形態であると言われたり、またそれが、ヒト以外の霊長類の一部について似たようなことが言われていると、必ずしも多くの学者はそれを直線的に結びつけたりはいたしませんけれども、少なくともそうしたキーワードを基に、人類の社会性の進化を霊長類全体の中の進化に位置づけていこうという指向性を持っていると思います。これについて私は、やはりそういう発想はおかしいのではないか、と思っております。3つ目に書いてあることですが、シェアリングと言った場合、ヒト以外の霊長類におけるシェアリングは、私が読む限り全て個と個の間のシェアリングなのです。それに対して、狩猟採集民のシェアリングを持つてくる時も、確かに個と個のシェアリングなのですが、それに対するものとしての、つまりいわゆるシェアリングがない社会における社会の在り方を見る時に、実は家族的単位の中における個と個のシェアリングというのが大前提としてあるわけです。そう見ていきますと、シェアリングというのはおそらく狩猟採集民の問題ではなくて、人類全体の問題である。つまり、家族的単位の中で見ていけば、シェアリングというのは、決定的にヒト特異的とは言いませんけれども、極めて特徴的な生存の形態であると私は考えております。その意味でも、狩猟採集民社会の特権性というのを認めることは何ら意味がない。

そこで取りあえず農耕民社会の例を二つ挙げます。「構造」と「非構造」あるいは「反構造」というも

のの関係で語ります。一つは、社会人類学の古典的な事例で、1954年にエドモンド・リーチが本で書いたものです。高地ビルマの、カチン高原地帯における gumsa と gumlao の振り子運動です。文化人類学者の方は、これは教科書的事例ですのでみなさんご存知でしょうけれども、カチン高原においては gumsa と言われる首長制的な社会であり、しかも権力の集中が進み、世襲の身分性も伴っているように見えるような社会、それを gumsa と言います、と現地では呼んでおります。これに対して、gumlao というのは平等的な社会であって、比較的小規模な、散開した社会である。多くの場合、それは首長制の、gumsa 社会の崩壊の果てとして見る事ができる。つまり、gumsa 社会というのは構造化志向のある社会であるのに対して、そこからの逃げ、遁走ですね、遁走としての gumlao の社会というものがある。エドモンド・リーチはこの二つの間が数字的に振り子運動を起こしている、と述べております。それについては後で出ます。もう一つは私の調査から、ボルネオ島の西部のサラワク丘陵部に住んでいる、焼畑民のイバンの社会です。これは典型的に平等社会、平等主義的な社会です。イデオロギーとして、極めて平等主義的な色合いの強い社会であって、散開性がもともと強い。ロングハウスという、長屋のような家に、長屋を一つの共同体のようにして暮らしておりますけれども、基本的に極めて、いろいろな側面で逃げが見られる社会です。個体のレベルでも、逃げようとする人が多々出てくる、あるいは家族単位で逃げたりもする、そういう社会であって、ある種の人類学者ではありませんけれども、歴史学者の規定によると、アモルフアスな、形のない社会であるというふうな特徴づけがなされております。イバン社会における、緊密な日常的な社会性と、非常にタイトに見える、主従を中心とした社会と、それから離れていこうとする個体の動き、そうしたものに、「構造」と「非構造」の関係を見ていこうと、そして最終的にはシェアリングについての話にまで持っていきたいと考えております。gumsa と gumlao についても少し触れておきます。先程言ったように、gumsa

を構造社会として見て、gumlao をそれに対して非構造と見るのが、一定の長さを通じた時間の中で起きているように語られるのだけれども、それがリーチの言うように振り子運動としてだけ見て、行ったり来たりのようにだけ見ていいものかということを考えにいれますと、必ずしもそうではない。より長い時間的な経緯を見ていくと、実は gumsa も gumlao も含んだ形でのカチン高原に住むような人々は、カッコ内にゾミアと書いてありますが、それはまた後で触れますけれども、中華帝国からの、大陸規模での逃げの社会、つまり逃散の果ての人々であると、そういう見方も最近はなされております。それは非常に時間的には長いものですが、そうした gumsa も gumlao も包括するような高位の構造の中で、「構造」と「非構造」が、併存と混在を再び認める事ができる。更に、こうした行為であっても更なる複合的な、場合によってはその中華帝国、あるいは東ユーラシア全体の地域的な構造というところまで考えてみるべきなのかもしれない、そういう位置づけが必要なのもかもしれないということです。

イバンのことになりますが、イバンのロングハウス共同体、私が研究していたところが、大体人口は100人程度、世帯数と言いますか、イバンの研究者の間ではそれを家族と呼んでおりますけれども、それがほぼ20です。40年間、大体これ一つを定点で見えておまして、人口と世帯数というのは変わらない。世帯数で1割程度のプラスマイナス5%、全体で1割くらいの増減はありますけれども、人口もほとんど変わらないでいるような社会。そしてその40年間、子供は非常にたくさん生まれる社会ですので、結局子供たちはどこかに行っているわけです。常にそういうふうの外に人々が出ていくことによって、ある村においては比較的同一の構造が保たれているような社会。これは非常にパラドキシカルなことであって、あるロングハウス共同体の構造的安定性のためには、そこに生まれてくる子供たちが、一定の時になると必ず外にいて、散開していかなければいけない。つまりそこに見られるのが非構造的な人間の行動形態なのですから、そうしたものを伴

いつつ初めて「構造」が現れるというところです。ですから構造的に見えるロングハウス社会も、内側から見ると個体のバラバラの行動が見えてきます。実際、これがイバン社会のアモルファス性というものを決めている。これは個体レベルであっても、ここではちょっと触れられませんが、イバンの家族であるビレック家族、ビレックというのはロングハウスの一つ一つの部屋のことですけれども、構造自体は安定しているけれども、実はその中の親子だとか、夫婦にしても兄弟関係にしてもバラバラに、非常に常に崩壊を内包しつつ、今辛うじて安定しているように見える、そういうところです。とりわけそれは家族が未来につながって、存続していくという、その存続そのものの中に実は不安定性を取り入れて、それによって存続が成り立っていく、つまり誰が家を継ぐとか、そういうことは最初から決まっていなかったわけです。私から言えばドタバタ喜劇の果てに家のつながりが見えてくる。これは家族だけではなくてロングハウス全体、あるいは時々できる人々の集まり、イバンというももとは首狩り族でしたので、首狩りに行く時の集団を作る集団の在り方、あるいはすこし前ならば出稼ぎに行く時の集団の作り方なんかにも見られるところです。

構造的行動をめぐる概念についてですけれども、これは足立さんが触れられたこととほとんど同じなので、ちょっとここは飛ばします。ただ私が強調しておきたいのは、「構造」と「非構造」の問題だけとは特にヒトの場合には言えない、言ってもあまり意味のないところがある。つまり「構造」から「非構造」に移っていく時の、人間の極めて意図的な在り方、それは感情的な面でもそうですし、あるいは打算的な、利害損得の面でもそうですし、人間関係でもそうですけれども、実際、「構造」を「非構造」に持っていく時の動きのプロセス自体は、「非構造」ではなくてむしろ「反構造」と呼ぶべきだと思います。足立さんのところに、本の表紙、「Ritual Process」が出ていましたけれども、Victor Turner がリチュアルの中で「反構造」というようなことを言いましたが、実はそれだけではなくて、もっと具体

的な社会プロセスの中での「反構造」という行動が人間にはある、つまり簡単に言うと反乱とか、いろいろな意味での反乱、革命、そうしたものがあります。そうしたダイナミックさを「反構造」と言っていると思います。それで、いまだ「構造」であるものの中に「反構造」が秘められている。「反構造」から「非構造」に至るといえることがあります。これは足立さんも触れられた通りです。それに対して、「非構造」から「構造」というのは、言ってみれば構造化というふうに呼びうると思いますけれども、その構造化には恐らく二つあるだろう。それは、一つには全くの非構造的なものから初発的に構造が成り立っていくことと、もう一つは先程の構造的なものが、反構造プロセスによって非構造化して、それが再び戻っていくというものです。そうした二つがあって、それを見ていけば少なくとも民族学的には丁寧な観察ができると思います。「構造」「反構造」「非構造」の時間的關係はこのようなものです。

先程述べたことになりましたが、カチン高原における、そうした gumsa、gumlao の両立というようなことも全体から言えば中華帝国、あるいはもうちょっと小さな平地の王国から、その支配に踏み込まれないための、つまり統治されない技術として、東南アジア山地、大陸産山地民社会とみるものが提唱されております。既に私が 30 年くらい前に言ったことですけれども、イバンという人々の民族形成自体も——実はボルネオの彼らの周囲の焼畑民社会というのは、結構構造化された成層社会なので——、そうした首長制、あるいは身分制社会の人々から逃げてきた人々のなれの果てではないのか。その意味では、カチン高原の在り方も、ボルネオのイバンというのも通底することがある。それは焼畑農耕民社会に結構共通するものではないかと思っております。実際そうしたかたちで「構造」「反構造」を見ていく時に、それも極めて長い時間的視野で見ていく時に、進化というものが語れる可能性がある。実際長い時系列枠の中で、こうした様々な社会的な束ねの在り方、構造的な束ねであったり、非構造的な束ねであったり、あるいはその両方を含むようなやや上位の束ね

だったりするものの継起、というかシークエンスとして進化というものをみていく可能性があるのではないか。

ここでシェアリングに戻ります。シェアリングというのを、家族単位、非常に小さなところでも家族内の個体間でのシェアリング、要するに簡単に言えば、生きていくための、食うためのシェアリングというものに焦点化していきますと、最終的には拡大家族であれ、合同家族であれ、あるいは小さな小家族であれ、あるいはバンドのような、やや大きな居住集団のように見えるものであれ、個体を超える消費の単位がどこに現れるかということとして見ることもできる。それが結局、シェアリングを生成していくということです。これを共同的な社会性の根源と見る。とすると、ここからちょっとポジティブな言い方をしますが、あえて冒険的に言えば、火の使用と関係があるのではないかと個人的には思っています。つまりそこにおいて初めて消費というのが、一つのを囲んで何かする、シェアリングの一つの在り方が現れてくるような気がします。それが進化の具体性ということなのですけども、私自身は解答しようがないので、単に思っているというだけのことです。

家族的な単位の形成と崩壊というのは、今言ったように消費の単位としての家族ということを考えることができる。家族的な単位の崩壊は、完全に構造崩壊になる。その場合には個体、生物的な単位になる。家族というのが構造的な単位であるのは、単なる同質個体の集まりではなくて、生物的な機能としても暮らし＝生の中で、関係的な役割としても異なるものだからである。その点では、消費の単位というのはインセスト・タブーと単独者に対する否定的な評価などと極めてよく似たところがあるだろうと思いますが、ここでは少し飛ばします。様々な試行錯誤的なことを言えば、進化の過程でこうした「構造」と「非構造」を見ることができると思いますが、

実際にはイバンの場合でも様々な層位で、こうした集まりの生成と崩壊ということが見てとれるわけです。

一番大事なことは、ヒトは単独個体としても生きていける。社会を再生産することはできないけれども自分が生きていく限りは生きていけるということだと思います。つまり非社会的でもいいのです。恐らくそれは我々現代の孤独でだけではなくて、狩猟採集民社会にもあるかもしれませんが、イバンなんかは人間が嫌になって一人で森に行ってしまう、などということがあるのです。そういうところまでいくとやはり、人間社会を嫌になってしまうことができるのが人間社会の特徴、いいところなのかと、それが進化の極みかなと私は思っています。ヒト社会の非構造的性というのは、基本的にこの単独個体としていくことの可能性に根拠を置いている。ただこの可能性が実現されるのは必ずしも一般的な事態ではない。まあ一般的だったら困ってしまうでしょう。

アンティクライマックスになりますが、社会性の進化について触れますと、やはり社会性の進化というのは社会的であることの複雑性の問題であって、眺めの距離を大きく取った場合、様々な位相における動態構造というものの、先程言った意味での束ねの累積が長い時系列での進化となるのだろうということです。極めて平凡な結論であります。ただ、カッコつきで言っておきますが、全ての層位において裏切りが内在しています。俺は知らんよ、と言うことができる。それが極めて人間的なところかな、と思っております。2分超えました、申し訳ございません。

河合：内堀さん、どうもありがとうございました。それでは続きまして、コメンテーターのお三方からコメントをいただきたいと思います。初めは、霊長類学の立場から坪川さん、どうぞよろしくお願いたします。

坪川：京都大学の坪川と申します。野生ゴリラの群れとヒトリオスの調査をしています。ゴリラで「構造」と「非構造」の共存様態がどのように捉えられるかをご紹介してから、各演者の方へのコメントと質問を致します。

ゴリラの基本的単位集団は単雄複雌群です。オスは性成熟に達する頃に出自群から移出し、ヒトリオスとして単独生活を送ります。成熟したヒトリオスにメスが加わることで、新しい群れが形成されるという生活史を持っています。メスは単雄複雌群やヒトリオスの間を移籍するのですが、成熟したオスが単雄複雌群に加わることはほとんどないと言われています。単雄複雌群を「構造」、ヒトリオスを「非構造」として、「構造」と「非構造」がどのように出会って、共存しているかということをご紹介します。

まず映像をご覧ください。この映像は、ニシローランドゴリラの群れと、重複した遊動域に生息している他の群れ、更に一頭のヒトリオスが出会った場面を撮影したものです。いまシルバーバック（成熟したオス）とメス、コドモたちが、道を渡っています。一斉に振りむきましたが、この時、彼らが来た方向からゴリラが誇示行動をしている音が聞こえていました。いま道に出てきたブラックバック（若いオス）A ですが、先程オスが単雄複雌群に加わることはないと申し上げたのですけれども、実は昨年、一頭のオスが断続的に群れと遊動をともにするという現象を観察しました。ブラックバック A は、群れ内の若いオスたちと一緒に移動や採食をして、4 か月後にまたふらっと出ていきました。映像の続きです。群れ出目のブラックバック B が一頭、道にとどまっている目の前に、隣接群のコドモが出てきました（写真 1）。その後、乳児を抱えたメスが出てきた後にブラックバック B は走り去って行きました。入れ替わりに、先程のブラックバック A が戻ってきて隣接群

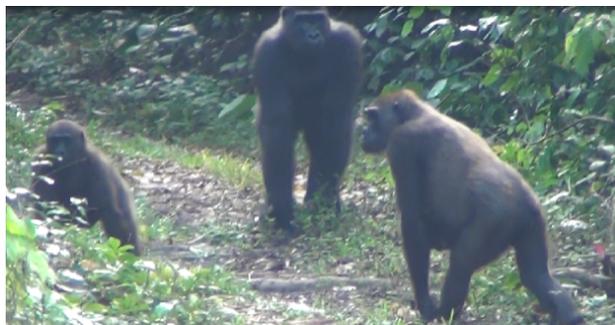


写真 1. ブラックバック B (奥) の前を通り過ぎる隣接群のコドモとオトナメス (手前)

が通過するのを眺めているところに、隣接群のシルバーバックが出てきました（写真 2）。更にその直後に、ヒトリオスが背中をそらして誇示行動をしながら道を渡って行きました。ブラックバック A は後ずさりして歩き去りました。撮影終了後、隣接群のシルバーバックとヒトリオスが、胸たたきを交わす音が聞こえてきました。ゴリラの日常生活のなかで、こんなに近い距離で群れやヒトリオスが出会って、社会交渉をすることがあるのです。

ヒトリオスが誇示行動をしながら単雄複雌群に接近する行動は、生物学的な説明としては、繁殖目的でメスを獲得するための行動だと考えられています。これまでニシローランドゴリラにおいて、群れを追



写真 2. 隣接群のシルバーバック (手前) を見つめるブラックバック A (奥)

跡した研究しか無かったために、群れにアプローチしてくるヒトリオスという観点、すなわち「構造」側の視点からしかニシローランドゴリラの社会は語られてきませんでした。ヒトリオスを追跡すると、また異なる様相のゴリラの社会が見いだせるのではと思い、私は1頭のシルバーバックのヒトリオスを追跡しました。すると、胸たたきをしながら群れにアプローチするヒトリオス像だけではなく、群れのコドモの音声などが聞こえてくると、藪の中にずっと隠れて静かに通り過ぎるのを待つなどして、群れとの対面交渉を避けるヒトリオスの姿もみえてきました。ヒトリオス同士も頻繁に遭遇しており、対面で出会った際には、お互いに胸たたきをし合い、ばたばたと枝を倒すなど誇示行動を示して離れていくという交渉などを観察しました。夜間にヒトリオスや群れのシルバーバックたちが、胸たたきを交わすこともありました。実に多様な出会い方をしていたのです。

簡単にまとめますと、ゴリラのオスの一生を見ると、まず出自群という「構造」の中からヒトリオスになって出ていき「非構造」と呼ばれる存在になり、そしてまた新しい単雄複雌群という「構造」に含まれるという変遷が生活史の中で見られます。一方、ゴリラのメスは定義上、常に「構造」に属するものですが、ヒトリオスと単雄複雌群の間を移籍する存在としては、「構造」と「非構造」の接点としても捉えられます。また、時系列ではなく、ひとつの森を共時的にみまわすと、群れとヒトリオスは重複した遊動域に生息していて、頻繁に出会っているという「構造」と「非構造」の接点もみえてきます。先程の映像を撮影した森では、単雄複雌群二群から三群と、他のヒトリオス数頭が日常的に遭遇する範囲で生息しており、多様な社会交渉が見られます。映像のなかでご紹介した、若いオスが一時的に別群のオスとつるむという事例に見られるように、「構造」と「非構造」を出入りするような個体も存在するので、ゴリラの社会には「構造」と「非構造」の多面的な接点が見られるということ、まずはご紹介しました。

それでは、各発表へのコメントに移ります。「規矩やルールに基づいて個体がふるまう」＝「構造」としての群れと、「行動の原則にとらわれない自由＝非構造」としてのヒトリオスという対比で、ゴリラの社会を扱うことに私は違和感があります。それよりも、足立さんの主張のように、「構造」と「非構造」が連続や接続をして、相互に社会交渉をしているのがゴリラの社会だと思います。密接に絡み合う「構造」と「非構造」を、足立さんのおっしゃるように質的にも生物学的にも説明することが、ゴリラの社会を考える上でも本当に必要だと感じました。ただし、ヒトリオスの「非構造」と、足立さんがヒトの例として挙げられた、ピグミーの自然発生的な歌や踊り、牧畜民のレイディングが、直接的に比較可能なものなのか、同じスケールで扱える対象なのかという点は疑問に思いました。

次に、曾我さんのお話を聞いて、「異なる価値観の表明」と「巻き込む動き」を観察することで認知される他者や、集団の境界で現れる他者は、個体が他の個体との区別化をはかる際に顕著にみられるのではないかと感じました。ゴリラを追跡中に、ゴリラとチンパンジーが出会う場面を何度か観察したことがあります。彼らは、互いに別種であるという「他者性」を感知しているからこそ、同所的に生息する近縁種として交じり合わずに共存できているという捉えかたは出来ないだろうか、曾我さんの発表を伺って思い至りました。この観点で考えると、霊長類の混群においては、同種や別種間でどのように他者性が立ち現れるのかが興味深いところです。

内堀さんの発表では、ロングハウスにおけるマクロに見た「構造」、共同体の安定性と、そこに内包された「非構造」的な不安定性、例えば個人のドタバタの末に誰が継承するか決まるという事例が挙げられていました。これは、類人猿の群れの継承なり、群れの生成過程、あるいは崩壊なりとパラレルに考えられるかもしれません。「反構造」については、例えばヒトリオスになる段階が「反構造」として捉えるのか、それとも別の現象を表す用語なのかを教えてくださいたいです。最後に内堀さんは、ヒトは人間社

会が嫌になったときに単独個体として生きることができ、これはヒトに独特の性質であると論考されていました。ではゴリラはどうだろうと考えた時に、私が追っていたヒトリオスは、他のゴリラとの出会いを避け、同時に他の個体も遊動しているところに「隠れて」生息していました。ゴリラ付き合いが一時的に「嫌になって」単独生活を送っていたと捉えられないこともないと思うので、「単独個体として生きていける」というのは、ヒトに限られた特徴ではないのではないかなという感想を抱きました。

全体へのコメントですが、「構造」と「非構造」、「他者」として取り上げている対象が、それぞれの学問分野で同じものを扱っているのか、スケールが

一致しているのかという点がとても気になりました。人類の社会性の進化を明らかにするためには、共在の様態がサルとヒトでどのように共通・相違していて、どこが連続・不連続なのかを論じていく必要があると思います。社会性の進化の解明へ向けて、今後はどのような方向性で迫っていくのか、その展望があれば伺いたい、というところでコメントを終わらせていただきます。

河合：坪川さん、どうもありがとうございました。それでは続きまして、真島さんの方から、社会文化人類学の立場からということによろしいでしょうか、お願いします。

真島:真島と申します。よろしくお願いたします。文化・社会人類学からのコメントということで、時間もかぎられておりますので、私とは分野の異なる足立さんと曾我さんのご発表にしぼって発言をさせていただきます。お二方が示された論点のうち、足立さんのご報告では、「構造」を前提とせずに「非構造」を語る方法はあるのかという問いかけを、また曾我さんの御報告では、真に理解しがたい「他者」とは人格の形成に関わるような他者ではないだろうかという問題提起を、たいへん興味ぶかくうけとめました。

混群にまつわる足立さんの印象的な事例からあらためて実感したのは、他者を抽象的な存在、いわば大文字の「他者」としてでなく、現に自分の目の前にいる何者か、自分とは異なる「いのち」の姿として考えなおす発想が、霊長類とは状況も水準もちがうにせよ、人間どうしの社会性を考察するうえでもたいへん重要な意味をもつのではないかという点です。おなじ人間どうしても、異なる個体、異なるいのちが会う場合、すでに対面状況の空間を共有するという次元で、他者性のある水準がその場、その瞬間に逡巡することは確かです。にもかかわらず、いやむしろだからこそ、いま自分の目の前に立っていたり座っていたりする「異なるいのち」の存在から、ヒトは微かな抵抗感のようなものに襲われるかもしれません。対象にむけられる好き嫌いといった感情以前の、情動の次元で、眼前にごろっと出沒した得体の知れない何者か、こういつてよければ、同じヒトであれいのちそれ自体としては異なる個体の翻訳不可能性のようなものに直面するからです。その意味では、ヒトの社会で概念として取り沙汰される匿名的な「他者」よりも、逆に個別の対面状況においてこそ、異なるいのちの他者性は深みを増していくという側面があるかと思えます。

河合さんがこれまで編集されてきた論集のタイトルに引きつけていいますと、この意味での他者性は、二個体間の対面状況にかぎらず、『集団』のレベルでも、あるいは集団が集団たるべき根幹をなす『制度』の側面でも、再考すべき余地があるように思いました。集団の制度や規範に背くような個体が出てくる場合、自分がこれまで漠然と了解してきた規範に目の前で平然と背くような何者かの存在から作動する他者性というのは、先ほどの対面状況におけるシンプルな他者性、つまり目の前にただごろっと存在するだけの事態から生ずる他者性と、それほど確かな区切れめをつけられるのかということです。群れのなかにいるべきでないはずの、得体の知れない個体が闖入してきたというだけで、そのこと自体がすでに規範に抵触し、ある種の霊長類であれば問題の個体に噛みついたり引っ掻いたりするかもしれないといった場面が、まったくの素人ながらここでやや示唆的に想起されても参ります。集団やその規範に関するレベルでの他者性と、異なるいのちの存在や現前そのものから惹起されるレベルでの他者性とのあいだに、研究者は理論上の境界線をどれほど明瞭に引けるのか。かりにふたつの他者性がある程度まで連続し、深層で通いあう関係にあるとすれば、規範レベルでの他者性は、異なるいのちがただ存在することの他者性以上に、「規範とその抵触」のようなしかたで論理面での説明をつけやすい事態とにいけるのか。

他者というモメントの枠内に限定していえば、「ヒトとヒト以外の霊長類を接続させる方法」という足立さんの問題提起にかかわるひとつのポイントも、まさにこの点にあるように思えます。別方面からの接続の可能性として、さきほど曾我さんは、「人格」という概念を霊長類の方にまで敷衍してもよいのではないかという問題提起をされました。ご指摘の趣

旨についてはたしかにその通りだと思いますが、自分とは異なるいのちと対面したさいに生ずる何事かが、かりに情動に近いものだとすれば、逆にそこは、あえて霊長類に「人格」を想定する以前に、ヒトでさえ人格が消失していく場面であるともみなせないか。そうした逆方向からの「接続」への補助線が引けないか。ある局面に投げ置かれた受動性 *passiveness* のさなかで個体が襲われるものこそ、情念 *passion* ならぬ情動であるとするれば、そこに人格なり主体なりを措定する手筈は、むしろ不要になるのではないかということです。実地の観察でどれだけ傍証がとれるかはべつにしても、いのちを帯びた個体が文字どおり「我知らず」襲われていく当の何事かを仮想の概念として措定する発想こそが、ヒトとヒト以外の霊長類を接続させる可能性につながるのではないかと、臆測するしだいです。

最後になります。ヒトの社会の場合には、異なるいのちだけでなく、特定の制度や規範そのものが、個体にむけて他者性をともないながら立ち現れる局面もあろうかと思えます。そのとき個体は、あるいは孤独ともいえる境地に立たされるかもしれません。先ほどの坪川さんのコメントでは、ヒトリオスの事例が紹介されましたし、足立さんの御報告でも、集

団との関わりからみた孤独についての言及がありました。ただ、はたして孤独とはつねに、制度なり規範があつて「構造」があるから生ずるものだと考える以外の可能性はないのかとも、私は考えています。いろいろな方のお話をうかがっているうちに、AA研の人類学の大先輩で、昨年鬼籍に入られた山口昌男先生の初期の作品に「徒党の系譜」という論攷があることを思い出しました。ふつう徒党というのは、だれかと「組む」ものであるにもかかわらず、山口先生がそこでお書きになっていて鮮烈な印象をうけたのは、「徒党はたったひとりの個人でも組めるのだ」という驚くべき主張でした。しかも、そこでいくつかの事例とともに特記されていたのは、規範や制度をぬきにした、つまりは言語以前の、徒党の身体性であったようにも記憶しています。

とりとめもない発言となりましたが、そろそろコメントの制限時間となりましたので、このあたりで話を閉じさせていただきます。

河合：どうもありがとうございました。それでは、最後のコメントーターとなりました。諏訪さんの方から、古人類学、形質人類学の立場からよろしくお願ひします。

諏訪：今日のコメントは現生の霊長類、あるいは人間を見ているだけではわからない側面を復習することと、最後に本日おうかがいしたお話について簡単にコメントしたいと思います。私は化石から人類進化を研究している者で、日頃の活動領域からすると、社会のお話は遠いのですが、話題提供としてお引き受けいたしました。

まずは大きな進化的な視点から始めますと、単純化すると、共通祖先から分岐して人類の系統が生じ、その後、アウストラロピテクス、ホモ属、そしてわれわれホモ・サピエンスに至ります。それで、一夫一婦的な社会構造、家族的なユニット、そうした人間社会の根幹と考えられているものがいつ頃から生じた、ということがあります。多くの人たちは、脳容量が増大してホモ属になって、未熟な新生児など様々な違いが生じ、そうした時点で、いわゆる家族的ユニットが生じたと考えているようです。そうでないと、繁殖がうまく行かず、種として集団を維持してゆけない。一方、オーウェン・ラブジョイ氏は、同じ繁殖との観点から、一夫一婦的な繁殖戦略は、実は、直立二足歩行の起源と同時に生じたのではないかとの説を長年主張してきました。この仮説については、いろいろな議論がありますが、私たちが発表したラミダスの登場で、状況がもう少し見えてきました。

ラミダスによって、大ざっぱには三つの進化的な段階があったということが分かりました。まずは、ラミダスで代表される、アルディピテクス段階があった。この時期は、樹上性を基本的に保持したまま、直立二足歩行はしていた。ただし、アルディピテクス段階（ラミダス）では、把握性の足を持っていた。これは樹上能力を高めるだけでなく、母親が木登りするとき子どもが母親にしがみつく能力とも関わるので、淘汰という観点からは、極めて重要だった

と思われます。地上では直立二足歩行を行いながら食物を確保していたと思われますが、その一方では、樹上空間を確実に利用できないと生存できなかった。おそらく、必ず樹上でネストを作っていたのだらうと思われます。それが、遊動パターンや集団構造などにも影響していたと思われます。

それから次に、アウストラロピテクス段階になり、把握性の足を放棄し、アーチ型の足が進化した。すなわち、樹上依存よりも地上の直立2足歩行を優先したのです。比較的長い距離を歩いたり、走ったり、開けた環境へもどのどん出るようになった。そして、樹上空間に依存しなくても生活できるようになっていた。地上でも、肉食獣など外敵への対応を何とかこなしていた、とのことになります。実際に社会構造がどうであったかはむづかしい問題ですが、例えば、ラミダスの時代よりも集団サイズが大きく、協力的な集団防御行動があったのかもしれませんが。身体的には、脳容量がアルディピテクス段階よりも20%くらい大きくなっていった可能性があります。それから、体サイズの性差が、ラミダスでは非常に小さかったのが、アウストラロピテクスではむしろ大きくなった。地上性と関係するかもしれません。

チンパンジーはやや開けたウッドランドにも出てきますが、基本的には森林適応です。疎開林環境ですと、ポピュレーションサイズも十分維持できなく、ギリギリでやっている。ラミダスは、森林もしくはその辺縁から、さらには開けたウッドランドをも縦横無尽に利用していたと思われます。「環境利用」としてはチンパンジーとも、アウストラロピテクスとも異なる状況だったのではないか。アウストラロピテクスとその後のホモ属は、さらに開けた環境に適応していた。ホモ属では、打製石器を本格的に使い始め、脳容量がどんどん大きくなり、テクノロジー依存型の適応戦略が加速していった。

以上のように、大きく3段階の進化の流れがあったと思われます。それで、一夫一婦型の繁殖戦略に話を戻しますと、ラブジョイ氏の起源モデルはラミダスの適応論とよく合致します。ラミダスで代表されるアルディピテクス段階については、化石の証拠から言えることが大きく三つあります。まずは、犬歯、特に雄の犬歯が劇的に縮小していること。それから、把握性の足を保持しているものの、直立2足歩行に適するように身体構造が変わっていること。それから生息環境が、現生の大型類人猿では十分に集団を維持できない開けた森や疎開林が中心であったらしい。ならば、繁殖効率を上げる工夫が何かあったに違いなく、それが犬歯の縮小と直立2足歩行とも関連するだろうと。これらを説明するのが、オスの食物の運搬と提供行動と、メスによるそうしたオス行動の選択との説明がラブジョイ氏の考えです。そういう選択圧のもとで一夫一婦型の繁殖戦略が優位になり、逆にそうでなかったならば進化しなかっただろうと。ただし、一夫一婦型といっても、一夫一妻、一夫多妻、一妻多夫が緩やかに混在する社会、チンパンジーあるいはクモザル類の社会のような多雌多雄群の中で、ペア型の繁殖戦略がより効率的で優位な社会、そういった解釈が妥当かと思っています。

人類の進化の三段階の中でも、一夫一婦型の繁殖ユニットのようなものは、食物の運搬と分配を伴う行動の一環として、おそらく最初期に直立2足歩行と共に進化したのだろうと。ただし、後のホモ属以降の家族的ユニットとは質的には異なる、構造化が進んでいない状態、そういう理解で良いかと思いません。では最初期の人類、アルディピテクスの段階でどういった食物を運搬し分配していたのか。この段階で本格的な肉資源依存は考えにくいので、広範な雑食型の採食戦略の中で、得難い食物を自然のコンテナのようなものを使って運搬していたかもしれない、などと想像しています。

次のアウストラロピテクス段階では、広範な雑食を継承しながらも、肉資源利用を増していたかもしれません。また、ラミダスよりもまとまりのある群

れ構造を持っていたと思われます。開けた環境で十分生存していくような社会構造、アルディピテクス段階よりも複雑な協力的行動や社会的なまとまりがあったかもしれません。

そしてホモ属に至りますと、脳の増大が加速度的におこります。脳が大きくなると、様々なことが変わりますが、その一つは生活史パラメーターの伸長です。子ども期も寿命も長くなります。家族を単位としたコミュニティ形成とまで言っているものが、おそらくホモ属の歴史の早期に出てくるのだろうと想像します。協力的行動の複雑化や本格的なホームベースみたいなものが想定されます。ホモ属の初期の段階から、新たなテクノロジーが次々と出現し、継承されてゆきます。音声言語なども、比較的初期のころから、徐々に、あるいは段階的に発展していったのではないかと想像しています。

大局的な人類進化過程を足早に見渡しましたが、そうした進化の観点から、今日のお話をいろいろ聞かせていただきました。難しいお話が多かったですが、まず感じましたのは、「非構造」「構造」という区別が、霊長類の社会行動進化の観点からは、私も専門外かもしれませんが、やや違和感を感じたということです。BSUみたいなものがあるので、それを切り口とするので「構造」となるのでしょうか、「非構造」「構造」を含めた全体を、いわゆる進化生物学的に解釈していきたい。霊長類側は、むしろそういう立場だろうと思います。では、今日の他のお話とどうつながるのか。「非構造」領域は、いわゆる「構造」という概念のバックグラウンド的な領域だという説明だったと思いますが、人類進化の第3段階(ホモ属の段階)になると、その多様性が圧倒的に増すのかな、という印象を受けました。それで、曾我さんの第三項による他者の理解のように、いわゆる「構造」と多様な「非構造」のインターアクションの中で様々なことが生じてくる。それからもう一つは、現代人の、より複雑な、多様な「非構造」の中で、「構造」と「非構造」を考えるならば、それぞれの要素となるものの起源は、萌芽的にはいろいろな進化段階で生じていただろうとのこと。ですの

で、それぞれの要素の意味合いは違っているかもしれない。「構造」「非構造」への取り込まれ方も、それぞれにあるのではないのか。そうした印象を受けましたので、コメントとして述べさせていただきます

した。

河合：諏訪さん、どうもありがとうございました。

質疑応答

河合：それですね、時間が今もう既に12時になっているのですけれども、12時5分までに終われ、と言われていたのですが、ちょっとだけ延長させていただいて、今お三方からコメント、それから質問、いくつかあったと思うのですけれども、パネリストの方々に、一言ずつだけ感想等をお答えいただいて、フロアから多分一つ、でしょうか、質問、コメントを受けたいと思います。では、足立さんから一言。

足立：2分ですよ。なるべく短く。ありがとうございます。私の方からは、今日、もうちょっと踏み込んでお話をしたかったのですけれども、「構造」と「非構造」をつなぐところが、そこそこ、生き物を見るところでは重要になるのではないかと、ということの裏には、それこそ本当に、その同じ空間を共有して、そこを使っている、生きていくためにその空間にあるものを食べ、襲われたら、襲われたものから逃げ、という、そこでやっていることを通してつながるといところが「構造」と「非構造」をつなぐものではないかな、ともう少し説明しないと答えにはならないと思うのですが、そういうところから考え始めたいと思っています、ということをお伝えしておきたいと思っています。

河合：ありがとうございました。では、曾我さん。

曾我：お三方からコメントをいただきましたけれども、坪川さんの話であらためて意識したのは、今日は基本的に、共在を前提においての話だったということです。例えば今回、哲学者の間主観性を挙げましたけれど、自分と同じことを考えている別の個体がいるという時に、対立することも可能です。例えば私はこのエサを食いたいけれど、あいつも食いたいと理解できる時には、わっとそこでケンカになっちゃうとか、違う群れ同士もそこで押し合いへし合いしちゃうとか、そういうことも当然あるはずで。

対立するということは生物学的には重要だと思うけれど、「他者」を議論する際に、対立はあまり重要ではないかなと思いました。むしろ、突然、他者と出会った時に、そこで何かインターアクションが起きて共在できる点に目を向けるべきだと思います。これは、真島さんのコメントに対しても同じです。全く何をするかわからない、ぶすっと刺してくるかもしれない他者がある。そういう状況において、なんとかその人と共在できるようになる、その可能性のところで「他者」を考えたいと思っています。

河合：はい、では内堀さん。

内堀：基本的には坪川さんへのお答えですけれども、人類社会で「構造」「非構造」というのを、わりと実体的に見ていく時に、僕にとって大事なものは、「構造」から「非構造」、とりわけそれへの動きなのです。ですから、それは「非構造」ではなくて「反構造」なのです。「反構造」的な動きであって、それは常にではないけれども、かなりの程度、一方方向的なのです。ですから、「構造」の完全な崩壊にまで至りうるものなのです。元に戻らない。それは恐らく、ゴリラのヒトリオスとは違うものだろうと思います。それから、その敷衍的に言えば、そのようなものとして「非構造」があり、「非構造」への動きがあるから、「構造」と「非構造」の両方を束ねたものとして、人間の歴史というものが生成してくるというのが私の発想で、だから、それがどうしてもやはり、ヒト以外の霊長類とは違うということになります。それは言語、言語じゃないということではなくて、人間の社会というのはどんな単位であっても、常に崩壊へ崩壊へというものを内包しつつ動いているからだろう、とっております。

河合：どうもありがとうございました。いよいよ時間が押しているのですけれども、それではフロアの

分科会事務局

京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室内

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

電話：075-753-4083

ファックス：075-753-4083

e-mail：jim AT anthro.zool.kyoto-u.ac.jp

http://anthro.zool.kyoto-u.ac.jp/evo_anth/evo_anth.html
